

氏名		受験番号	
----	--	------	--

2024年度 大学院入学試験問題  
経済学研究科  
経済学専攻 博士前期課程 <一般入試(春)>  
筆記試験

(注意) 解答は別紙解答用紙を使用のこと

ミクロ経済学 ・ マクロ経済学 ・ 計量経済学 ・ 経済史 ・ 社会経済学

問1

二種類の生産要素 $x_1$ と $x_2$ を投入し、生産物 $q$ を生産する企業を考える。生産関数は

$$q = x_1^{\frac{1}{3}} x_2^{\frac{2}{3}}$$

である。生産要素 $x_1$ の1単位あたりの価格は $w$ 、生産要素 $x_2$ の1単位あたりの価格は1とする。

- (1) 費用 $c$ を、 $w$ と $x_1$ の関数( $x_2$ を含まない式)で表しなさい。
- (2)  $x_1$ の要素需要関数( $w$ と $q$ の関数)を示しなさい

問2

ある消費者の財 $x$ と財 $y$ からの効用 $u$ は、次の関数で表される。

$$u = (2x - 10)^{0.8} (y - 10)^{0.2} \quad (x \geq 5, y \geq 10)$$

- (1) 財 $x$ の限界効用を式で表しなさい
- (2) 財 $y$ の財 $x$ に対する限界代替率とは何か。言葉で説明しなさい。
- (3) 財 $y$ の財 $x$ に対する限界代替率を式で表しなさい
- (4) 予算が300で、財 $x$ の価格 $p_x = 2$ 、財 $y$ の価格 $p_y = 1$ とする。効用を最大にする消費量 $x$ と $y$ を求めなさい。

問3

リスク下における意思決定についての期待効用理論は、現実には妥当しない場合があることを、以下の選択の例を使って説明しなさい。

- ①  $A_1$ と $A_2$ の間の選択  
 $A_1$ : 収入5 (確率1)  
 $A_2$ : 収入10 (確率0.1), 収入5 (確率0.89), 収入0 (確率0.01)
- ②  $B_1$ と $B_2$ の間の選択  
 $B_1$ : 収入5 (確率0.11), 収入0 (確率0.89)  
 $B_2$ : 収入10 (確率0.1), 収入0 (確率0.9)

氏名		受験番号	
----	--	------	--

2024年度 大学院入学試験問題  
経済学研究科  
経済学専攻 博士前期課程 <一般入試(春)>  
筆記試験

(注意) 解答は別紙解答用紙を使用のこと

ミクロ経済学 ・ **マクロ経済学** ・ 計量経済学 ・ 経済史 ・ 社会経済学

## 1 総需要・総供給 (AD-AS) モデル

閉鎖経済における総需要・総供給モデルを考える。以下、時間が  $t=0, 1, \dots$  のように離散的に経過する状況を考える。時間の経過とともに変化する変数については、その時点  $t$  における値を、右下に  $t$  を添字として書くことによって表すこととする。

総需要曲線は、アウトプット・ギャップを  $y_t$ 、インフレ率を  $\pi_t$ 、需要ショックを  $e_t$  として、

$$y_t = -b \times \pi_t + e_t \quad (1)$$

で与えられる。ただし  $b$  は  $b > 0$  を満たす定数である。

総供給曲線は、コスト・プッシュ・ショックを  $v_t$  として

$$\pi_t = \pi_{t-1} + k \times y_t + v_t \quad (2)$$

で与えられる。ただし  $k$  は  $k > 0$  を満たす定数である。

以下の問題に答えよ。回答の際に仮定を追加する場合は、それらの仮定について明記すること。

- (1-a) アウトプット・ギャップとはどのような概念か、説明せよ。
- (1-b) 時点  $t$  におけるアウトプット・ギャップ  $y_t$  およびインフレ率  $\pi_t$  を、需要ショック  $e_t$ 、コスト・プッシュ・ショック  $v_t$  および一時点前のインフレ率  $\pi_{t-1}$  を用いて表せ。
- (1-c) 45度線モデルにおいては、政府購入（政府による財・サービスの購入量）を増やすことで総生産を増やすことが可能であった。この問題における総需要・総供給モデルにおいては、現時点で一時的に政府購入を増加させることは、現在から将来にかけてどのような帰結をもたらすか、問 (1-b) の回答と関連づけながら説明せよ。
- (1-d) この問題における総需要・総供給モデルにおいては、現時点から恒久的に政府購入を増加させることは、現在から将来にかけてどのような帰結をもたらすか、問 (1-b) の回答と関連づけながら説明せよ。

## 2 為替レートと国際金融

日本円と米ドルの名目為替レートは通常、1ドル= $X$ 円という形で表現される。

- (2-a) 購買力平価 (purchasing power parity) とはどのような概念か、そして購買力平価が成立するときには  $X$  はどのように決まるかを説明せよ。
- (2-b) 名目為替レートの変化を扱う理論として、金利平価 (interest rate parity) というものがある。金利平価とはどのような概念であるか、説明せよ。
- (2-c) 2023年において、日本円と米ドルの名目為替レートは1月にはおおよそ1ドル=130円だったのが12月にはおおよそ1ドル=150円まで変化した。同時期における10年物国債のイールド（本問では金利と考えてよい）は、日本ではおおよそ0.5%から1%の間で、アメリカではおおよそ3.5%から5%の間で推移していた。金利平価はこれらのデータと整合的であるかどうか、理由とともに説明せよ。
- (2-d) 国際金融のトリレンマとはどのような概念であるか説明せよ。